

小向 太郎 先生

『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』

「7 万年前、ホモ・サピエンスはまだ、アフリカの片隅で生きていくのに精一杯の、取るに足りない動物だった(あとがき)。」その人類が「全地球の主」となり、生態系をも根本から変えている。いったい、どうしてそんな事が可能になったのか？ 著者は、人類だけが実際に存在しないものを信じることができるからだ、と喝破する。確かに、神も国家も企業も貨幣も、ヒトの頭の中だけにある。そして、これらが人類の活動を支えていることは間違いない。該博な知識と大胆な構想で、世界に衝撃を与えたベストセラー。

『ハロー・ワールド』

「7 万年前、ホモ・サピエンスはまだ、アフリカの片隅で生きていくのに精一杯の、取るに足りない動物だった(あとがき)。」その人類が「全地球の主」となり、生態系をも根本から変えている。いったい、どうしてそんな事が可能になったのか？ 著者は、人類だけが実際に存在しないものを信じることができるからだ、と喝破する。確かに、神も国家も企業も貨幣も、ヒトの頭の中だけにある。そして、これらが人類の活動を支えていることは間違いない。該博な知識と大胆な構想で、世界に衝撃を与えたベストセラー。

『宇宙にいのちはあるか』

宇宙にはどんな生物がいるのだろうか。一度でも思いを馳せたことがある人なら、ぜひ読んでほしい。人類は探査機を太陽系の果まで送りつつある。火星に生命の痕跡はないのか？ 木星の衛星エウロパの巨大な海、土星の衛星タイタンの川や湖、海王星で荒れ狂う嵐のなかはどうなっているのか。「そこになにかいるのか？」筆者(NASA の日本人技術者)の熱い想いが伝わってくる、一気読み必至のサイエンス読本。

茂田 忠良 先生

『国土が日本人の謎を解く』

日本人とはどういう民族か。世界の諸国の人々と比べて、どういう特徴があるのか。今まで、多くの日本人論が出版されており、私も山本七平の『ユダヤ人と日本人』やルース・ベネディクトの『菊と刀』初め色々読んできましたが、その中でも、本書は相当説得力があります。それは、著者が旧建設省の技官で、日本の国土自然という与件との関係で日本人論を展開しているからです。

著者によれば、江戸時代には全国に 6 万以上の村落共同体があり、それぞれの村の人口は約 400 人程で村人全員が知合いで、村人は水田稲作のため、灌漑設備の設置や水の配分、田植え、稲刈り、道普請、屋根の葺き替え、冠婚葬祭など、生活全般に亘って協力して生活していた。日本人は、そのような生活の中で「共」を発見たと述べています。(因みに、著者はヨーロッパ人は「公」を発見し、中国人は「絶対権力」を発見した旨述べています。)

私は今まで、40 ヵ国以上の外国を訪問し、仕事でも多くの国の人と付き合いってきましたが、やはり日本人は世界の中でも変わった人々であると思います。

日本人とは何か、興味がある人にお勧めします。

『奴隷と奴隷商人』

皆さんは、奴隷貿易を知っていますか？ 奴隷貿易は 16 世紀に始まり 19 世紀まで続きましたが、アフリカ大陸から約 1500 万人の黒人が連れ去られ、主に南北アメリカに売られて行きました。航海の途中で 200~300 万人が死亡し海に捨てられました。アメリカに着くと、「プランテーション」という大規模農場や鉱山で酷使されました。

プランテーションでは、砂糖、コーヒー、綿花、タバコなどが大量生産され、その結果、ヨーロッパの庶民はこれらの商品を安価に享受するようになりました。欧州大陸のコーヒー飲用も英国の有名な「アフターヌーン・ティー」も奴隷労働のお蔭です。

現在、世界は「グローバル化」と言われるように、世界が一体化しています。しかし、実はそれは 16 世紀のヨーロッパ諸国の世界進出から始まり、奴隷貿易と密接に結びついていたのです。欧州の発展の基礎には、奴隷を犠牲にしたヨーロッパの生活向上、富の蓄積があったのです。

奴隷貿易を知ることは、世界の近現代を知るために不可欠です。本書は奴隷貿易について分かり易く書いてある絵本ですので、近現代史に関心のある方には御一読をお勧めします。

『武士道』

武士は、鎌倉時代から江戸時代まで、600 年から 700 年間に亘り、我が国を実質的に統治してきました。そして、明治維新後、帝国主義の世界、欧米の帝国主義諸国が互いに覇を競い合う中で、旧武士階級の人々は、我が国の独立を守るために、その近代化と発展にも大きく貢献してきました。

そのような武士の倫理観の源泉とは何であったのか。それについて、新渡戸稲造先生が欧米諸国の読者を念頭に英語で執筆したのが『武士道』です。出版は 1899 年でしたが、世界的に反響を巻き起こしました。本書はその現代語訳です。

武士道は現代日本社会には残っていませんし、意識されることも殆どありません。しかしそれでも、一部が日本社会の奥底に伏流水の様に残存し、日本人の倫理観や考え方に影響を与えているのではないかと思います。

日本人とは何かを知りたい人には、是非読んで欲しい本です。

最後に、本書中の林子平の名言を紹介します。「義は勇の相手にして裁断の心なり。道理に任せて決定して猶予せざる心をいふなり。死すべき場にて死し、討つべき場にて討つことなり。」(本書では現代語に訳されていますが)強い言葉ですね。

太田 茂 先生

『いのちのヴァイオリン』

著者の中澤さんは、日本最高の弦楽器製作者、鑑定家の一人です。貧しくとも厳しく愛情深かった父親が趣味で作っていたヴァイオリンの魅力に惹かれ、若くしてイギリスに渡り、ヴァイオリン製作の修行を積みました。その誠実で真摯な人柄により、多くの音楽家や弦楽器製作者から信頼され、応援されて技術を磨いた後、帰国し、渋谷に日本ヴァイオリンという立派な弦楽器店を創設しました。ストラディヴァリウスを始めとした最高の楽器を取扱い、日本のみならず欧米の著名な音楽家達の楽器の修理やお世話をし、また地域の音楽活動の様々な支援もしています。東日本大震災のあと、復興を支援したいと、津波で倒壊した家屋の木材を用いてヴァイオリン、ビオラ、チェロを製作し、「TSUNAMI ヴァイオリン・プロジェクト」として、プロアマを問わず 1000 人の音楽家たちが弾き継いでいく企画を続けています。現天皇陛下も、このビオラを演奏されました。心暖まる本です。

『江戸の遺伝子：いまこそ見直されるべき日本人の知恵』

著者は江戸 260 年の時代を築いた徳川家の十八代の当主です。江戸時代というと何か昔の古い封建時代のように感じられるかもしれませんが、そうではありません。日本が明治維新後に急速に近代化でき、今日の繁栄を築いたのは、江戸時代に生まれ、築かれた様々な素晴らしい文化、経済、社会の基礎があったからです。ヨーロッパやアジアの諸国では権力を持つ国王に富も集中し、民衆は抑圧と悲惨な貧しさに苦しんでいました。しかし、日本は権力や権威を持つ武士が、質素・勤勉で厳しく自己を律し、身分が最も低い町民たちが活発な経済活動による富を得て豊かな生活を楽しんでいました。町民達の識字率の高さ、江戸の街の衛生の充実、勤勉で礼儀正しい国民性などは、当時来訪した外国人たちが驚嘆しています。日本人として、自らの歴史を学ぶことは大切であり、本書はその最良の入門書の一つです。

『ゼロ戦特攻隊から刑事へ』

自分の本でスママセン。でもこれはスゴイ本です(著者がスゴイのではなく、主人公の大館和夫氏がスゴイのです)。氏は現在 93 歳。警視庁本部道場の剣道稽古会の最長老で、今も週三回の朝稽古を欠かさず、少年剣道の指導も 30 年以上続けています。氏は、16 歳で予科練に志願し、ゼロ戦に乗って台湾やフィリピンで太平洋戦争を戦いました。18 歳で特攻隊に「志願」し、以来、7 回の特攻出撃をするも敵艦と遭遇せず、昭和 20 年 8 月 15 日の最後の出撃直前に天皇陛下の玉音放送により出撃が中止され、奇跡的に生還しました。同期の桜の戦友の多くは特攻戦死。氏は、20 歳で警視庁警察官に採用され、亡き戦友への鎮魂の思いに支えられて警視庁の名刑事として活躍し、様々な重大事件を解決しました。今の日本の繁栄は、国と国民のために命を捧げたこのような無名の多くの若者たちの尊い犠牲の上に成り立っています。一人でも多くの国民に読んでいただきたい本です。

鈴木 秀洋 先生

『傷ついたあなたへ1』『傷ついたあなたへ2』

『マイ・レジリエンス—トラウマとともに生きる』

DV・性暴力は、稀に被害にあう人がいるのではなく、日々多くの人が被害にあっている。この本は、「傷ついたあなたへ」、またサポートする人、教員等に対し、DV・トラウマへの正しい理解を促し、暴力の影響を乗り越え自分らしく輝くための知識・知見(ワーク等含む)を示し伴走してくれる(1巻)。DVの辛さ、そして加害者理解、回復の途中で気を付けておきたいこと、自分を大切にする歩みなど、実に具体的で実践的である(2巻)。温かさと優しさが伝わってくる。一人で読むのでも、みんなでワークをしながらでも良いだろう。

そして読後更に、中島幸子『マイ・レジリエンス』を読んでほしい。きっと心の奥底まで響くはず。皆さんにとってのバイブルとなってくれる本である。

『何を怖れる—フェミニズムを生きたおんなたち』

本書は、田中喜美子、上野千鶴子ら12人の日本を代表するフェミニストの伝言を収める。著者の松井久子は、かつてフェミニズムに偏見をもち距離を置いてきたと吐露する。しかし、彼女らの言葉を聞き、女達の分断の原因は、幼年から「いい子」であり続ける教育を受け、もめたくない、嫌われたくない、何かを変える力はないと思われてきた自身らに巣食う「怖れ」にあると気付く。「個人的なことは政治的である」と女の痛みや苦しみの原因となる社会(構造)と戦ってきた彼女らのありのままの「女としての固有の人生」を映し出すことで、次世代への力強い応援歌となっている。学生たちが「怖れ」なく生きていけるよう、私もここでフェミニスト宣言！本書の後には一緒にDVD鑑賞をして議論をしよう。

『家族幻想—「ひきこもり」から問う』

目黒区事件、野田市事件、札幌市事件と児童虐待死事件が続く。また同時期の殺傷事件を機に「ひきこもり」を問題視する報道も過熱する。これらの事件に通底するのは、脈々と引き継がれてきた「家族」に対する「幻想」ではないか。筆者は、私達は現代社会に合わせて加工された命を生きなければならないのだろうかと問う。そして、社会が流動化し、家庭が孤立化し、個人が様々なものに分断される今、私達に処方箋を示す。「この社会はあなたのそして私の場所だ」とまず、子どもと若者に伝えなければならない。他者に眼差され、値踏みされ、社会に評価され位置付けられるのではなく、「生きる主体としての自分を作り出す営みが不可欠」であり、私達にできることはまだまだあるはずであると。

大八木 時広 先生

『大統領とハリウッド～アメリカ政治と映画の百年』

政治と文化の関係は歴史的には緊張関係にありました。バイエルン公国の王ルートヴィヒの権力と富を、自らのオペラのために利用した作曲家ワグナー。映画・ラジオ・絵画・音楽をナチのプロパガンダのために利用し尽くしたヒトラー。こうした緊張関係の現代版の一つが、アメリカの大統領とメディア帝国ハリウッドでしょう。著者は映画に造詣が深いことでも知られている国際政治学者の田村晃嗣氏。ハリウッドが作る映画やドラマでは、アメリカの大統領はどう描かれているのか、政界はハリウッドにどう反応するのか。豊富な映画の事例を交えて、われわれの知らないアメリカが浮き彫りにされていきます。映画好きなあなたにもおすすめの一冊。

『チャーチル・ファクター～たった一人で歴史と世界を変える力』

みなさんは、ウィンストン・チャーチルを知っていますか。名門貴族の子息、陸軍将校、戦場ジャーナリスト、名文家といったさまざまな顔を持つ人物ですが、その人生のハイライトは、やはり第二次世界大戦下での英国首相職でしょう。アメリカが参戦する前、ヨーロッパで孤独な戦いをナチス・ドイツに挑むイギリス。チャーチルはそのイギリスをいかに導いたのでしょうか。この本は、そんな謎に、さまざまな珍しいエピソードも交えつつ迫っていきます。著者は、作家でもあり、先日、英国首相に就任したボリス・ジョンソン氏です。ジョンソンの政治家としての資質はともかく、この本は本国以外でも高い評価を得ています。一読の価値あり。

『世界を変える STEAM 人材～シリコンバレー「デザイン思考」の核心』

みなさんはどんな未来を作りたいですか。世界をどう変えたいですか。そのためにはどんな人材が求められるのでしょうか。ここで紹介する本は、そんな未来に向けて、これから求められる人材像を STEAM というキーワードを使い、解き明かします。STEAM とは、Science(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Arts(アート)、Mathematics(数学)という単語の頭文字を組み合わせた造語です。こうやって見ると理系の話みたいですね。しかし STEAM とは、理系、文系、といった既存の領域を超えようとする概念であり、理系の人たちが文系領域を取り入れようといった話ではありません。既存の殻を破ってみたいと思っているあなた。この本はそんなあなたに「気づき」をもたらしてくれるでしょう。

上野 幸彦 先生

『ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業 上・下』

わたくしは、長い間、法学に携わってきたので、しばしば法の理念でもある正義あるいは公正について考える機会がありました。政治哲学や法哲学において大いに議論されているテーマですが、この問題を、人びとの関心に引き寄せて、学生(市民)との対論という形式で、とても印象的な議論を展開し、日本でも2010年頃に大いに話題となったのが、NHK教育で放送されたサンデル教授の「白熱教室」という番組でした。そこでは、イチローの報酬が正当か、といった問いも投げかけられています。この放送を基にして作られたのが、紹介した図書です。皆さんも、是非手に取って、問いについて考えてみてください。(もし、興味が湧いたら、「これからの『正義』の話をしよう」という本も読んでみてください。)

川中 敬一 先生

『冷戦史 その起源・展開・終焉と日本』

本書は、第2次世界大戦後の相当期間、基本的な世界構造となっていた冷戦の概説書です。本書は、冷戦を「起源」、「展開」、そして、「終焉」と3つの時代に区分しています。本書の最大の特徴は、それぞれの時代区分を米ソ中心の世界的動向と並行して、各時代区分における日本の動向を紹介している点にあります。つまり、世界の動きと日本の動きの関連を理解するには最適の書であると言えます。記述内容は、高校生程度の知識があれば、十分に理解できます。また、今日、我々が見聞する各社会現象の「発端」と「経緯」を理解するにも有用な書と言えます。それは、時事用語をいかに繋ぎ合わせれば社会現象の本質を表現できるか、という就職試験の面接や小論文に挑戦する際に求められる「生きた知識と思考」を養ううえでも、本書はとても有用であると感じます。人生において冷戦時代は「歴史の1コマ」となってしまう若い人たちにこそ、今日の社会を理解するために、本書を是非とも読んでいただきたいと思います。

『中国の論理 歴史から解き明かす』

推薦者は、常日頃感じていることがあります。それは、我々日本人ほど中国とアメリカを理解していない国民はいないのではないかと。特に、「どうして中国人(あるいはアメリカ人)は、こんなことを言うのだろうか?するのだろうか?」と疑問に、明解に答えることはむずかしいのではないのでしょうか。今回は、中国(人)の言動の淵源・背景を的確かつ簡明に説明してくれる書を紹介します。本書の大きな特徴は、「中国における歴史のもつ意味」、「その歴史を学び社会を牽引する中国人エリートの共通教養」、そこから派生した「中国人の世界観・世界秩序観」、そして、それが瓦解しそうになった「近・現代への中国人エリートの受け止め方」を簡潔に解説していることでしょうか。中国や中国人を好きでも嫌いでも、中国が隣国である事実を動かすことはできません。それは、中国を無視することはできない、ということでもあります。中国と協調するにせよ対決するにせよ、中国人の思考・行動の不変部分を理解しておく必要性は、今までになく日本にとり大切なことであると言えます。そうした観点から、中国人の思考・言動の原理を理解するうえで、本書は必読書であると思います。

『災害復興の日本史』

日本は、戦争などは数百年に1回あるかないか、犯罪も社会の根底を揺るがすような事案はめったに発生しません。ところが、ほぼ毎年のように複数の災害に国土のどこかが見舞われ、少なからぬ犠牲者を出し、社会の混乱をきたしています。よって、日本人にとって、「危機」といえば災害が真っ先に思い浮かぶことでしょう(それで良いとは思いませんが)。そういった日本であるため、災害と、それに立ち向かう防災や復興に関する記録も、古代から残っていることに驚かされます。古くは、奈良時代以前の記録を確認することができるのです。本書は、我々の祖先が残してくれた貴重な記録のいくつかを紹介しながら、日本特有の災害被害、復興、防災といった問題を整理しています。本書は、自然科学のみならず、災害にまつわる問題は、社会や文化という側面からも考察する必要があることを教えてください。単なるノウ・ハウ本ではなく、文化史としても本書を読むと、時間の経過を忘れさせてくれるでしょう。

